

2009南半球春シーズンの話題から View from Down Under

ハイランド真理子

マイトアンドパワーとジャック・デナム師

「今年は還暦でいい年になるかも知れない」なんて思っていたら、あまりいいこともなく終わってしまいそうだ。もっとも、怪我も病気もなく過ごすことができたのは、やはり天に感謝すべきなのかも知れないけれど……。さて、私がオーストラリアの競馬に関わってから何頭かの「凄い」馬を見ているが、その中のトップにいるのが、マイトアンドパワーである。マイトとパワー、全能なる力。恐らく聖書の中の言葉なのだろう。マイトアンドパワーは、まるで天からの贈り物ではないかと思わせるほど強かった。1997/98シーズンと1998/99シーズンのチャンピオンになり、4歳でコーフィールドカップとメルボルンカップのダブルタイトルを獲った。さらに5歳でWSコックスプレートも勝っている。2着を7馬身半も突き離して勝ったコーフィールドカップの勝ち方は強烈で、今でも目に焼きついていて、震えるような強い勝ち方であった。

そのマイトアンドパワーと一体であったのが、ジャック・デナム調教師。競馬場に来ていてもマスコミには絶対に話をしない、グランピー（機嫌の悪い）調教師として知られていた。「あんたらには俺が必要かも知れないが、俺にはあんたらは必要ないね」と、競馬記者に語ったと言われている。ここ何年かは重病を患っていたという。最近まで、椅子に座り込んでいたがパドックで馬をじっと見つめているデナム調教師を、何回か見かけていた。そのデナム調教師が先日85歳でこの世を去った。数年前マイトアンドパワーのオーナーと喧嘩の末、オーナーが所有馬をすべて引き上げるというドラマもあったが、オーストラリアの生産の歴史に残るマースケイをゴールドスリッパーに勝たせた調教師としても知られており、オーストラリア競馬の歴史を飾る調教師であった。黙祷。

アパッチキャットの引退

ジャック・デナム調教師の逝去と同じくらいに、競馬ファンにとって悲しい出来事は、我々のアイドル、アパッチキャット引退のニュースである。同馬は2005年から2009年の間にG I レース8勝を含

む19勝を挙げ、強いだけでなく真っ白な模様が入っているユニークな顔でも人気になった。今月13日に行われた香港のG I 香港スプリントに出走したが、入線後200mで騎手が異常を感じたという。レースは7着に終わったのだが、その後の診断で種子骨にひびが入っていることが判明した。現在は遠征先の香港で療養中、今月末にはオーストラリアに戻る予定だ。その後は、メルボルン空港近くのタラマリンにある、LIVING LEGENDS（リビングレジェンズ）という牧場に行くことになっている。リビングレジェンズは、引退したチャンピオン馬たちの終の棲家で、多くの競馬ファンがここを訪れる。前述したマイトアンドパワー、ドリーマス、ベタールースナップ、セイントリー、フィールズオブオマーなど錚々たる馬たちがいて、あのサイレントウィットネスやブリッシュラックなど香港のスターホースもいる。来年からテイクオーバーターゲットも加わることになるから、私も、彼らが生きていたうちに一度会いに行ってみたいと思っている。それにしても、このアイデアは競馬振興のためのGOOD IDEAである。日本でも、東京に近いところにこうしたリビングレジェンズのパークを作れば、競馬ファンが大挙して訪れるに違いない。メルボルンのこのパークでは、結婚式などのファンクションもできることになっている。

セークリッドキングダムの活躍

今回の香港国際レースで、アパッチキャットを含め



リビングレジェンズのパークでくつろぐマイトアンドパワーと、触れ合いを楽しむ子供たち



たオーストラリアからの遠征組の成績は、残念ながらパッとしなかった。アパッチキャットは故障、シーニックブラストは鼻出血、オールサイレントは最後まで前が開かず惨敗となった。しかしながらオーストラリアの生産者にとってはまずまずの結果だった。なぜなら、オーストラリア産馬セークリッドキングダムがG I 香港スプリントに優勝したからである。香港国際スプリントでオーストラリア産馬が優勝したのは今回で11回目。また、この日香港で行われた10レース中、オーストラリア産馬は、ミスターセレリティ、ハートライン、アルガーヴと、セークリッドキングダムを含めて4頭が優勝している。

さて、現在世界最強のスプリンターとされているこのセークリッドキングダムは、昨シーズンのオーストラリアのリーディングサイアーであるエンコスタデラゴ産駒で、母の父は名チャンピオンであったゼディタヴだ。2005年のメルボルン・プレミア・イヤリングセールの出身馬で、セリでは20万ドルで落札された。今回のレースで、21回出走、13勝、3240万香港ドルを稼ぎ出したという。なお、オーストラリア産でG I 香港マイル2着のハッピーゼロ号はダンゼロのせん馬で、前走G II スプリントトライアルでは、セークリッドキングダムを負かしている。

オーストラリアでは、年が明けるとセークリッドキングダムがやってきて、オーストラリアの馬をなぎ倒すのではないかと「期待」されている。オーストラリアの地で数々の重賞レースを勝てば、1930年代に大活躍したファーラップよりも偉大なチャンピオン馬になりうるというのだ。2010年、セークリッドキングダムに走って欲しいのは、フレミントン競馬場でのライトニングステーキス(G I)、コーフィールド競馬場でのオークリープレート(G I)、そして、フレミントン競馬場でのニューマーケットハンデキャップ(G I)。確かに、セークリッドキングダムが遠征すれば、これらの競馬場に多くの人が集

まるに違いない。ぜひ実現させ、スーパースターとして生まれ故郷に錦を飾って欲しいと思う。

パティナックFの事業展開

今年も、パティナックファームは、大きな話題を提供した。最近の話題は、パティナックのエージェントであるベルモントブラッドストックが、フランスのアルカナのセリで、6頭の繁殖牝馬を購入したこと。2007年生まれの子馬ドウインガ(父ホークウイング、母の父セクレタリアト)、GⅡ優勝馬マダムトロップヴァイト(父インヴィンシブルスピリット、母の父ワージブ)、その他にも4頭買っていた。フランスが大好きなティンクラ氏が、良質の牝馬を継続的に集めていることが分かる。

もうひとつは、専属調教師のジェイソン・コイル調教師の話題。同師は、1年前にネイサン・ティンクラ氏がカントリータウンのニューキャッスルから連れてきた無名の調教師だ。しかしながら、この1年間で目覚ましい実績をあげていて、今年4月のシャンペンステークスで、ワンモアノーモアを優勝させ、パティナックファームに初めてのGⅠ勝利をもたらした。また、牝馬リンキーディンクで6月にGⅠT.J. スミスクラシック、さらに、牡馬トラスティングで8月のGⅡワリックステークスを勝った。ところが、ドラマはその後パート・カミングス調教師の厩舎長をしていたジョン・トンプソン氏が専属調教師の一人に加わったことから始まる。ティンクラ氏は、シドニーのワリックファーム競馬場にコイル調教師とトンプソン調教師の厩舎を並べたのだという。騎乗のインストラクションの相違なども含めて、新しい調教師と並んで仕事をすることを拒否したコイル調教師が解雇されたらしいというのだ。これまでティンクラ氏の馬100頭は、これら二人の調教師が半分づつ管理していたが、現在は、トンプソン調教師が100頭の馬を管理するという羨ましい立場になったとメディアは語っている。羨ましいかどうかは、今後のトンプソン調教師の活躍しだいだろうけれど……。どこの国でも調教師とオーナーの関係はなかなか難しい。

さらに、同ファームが、新しいCEOを任命したことも話題になった。新しいCEOは、これまでオーストラリアのリッチマンだった故ケリー・バック氏の会社で、22年間ファイナンシャルエグゼクティブを務めてきたピーター・ビア氏。今回の任命について、パティナックファームの会長であるネイサン・ティンクラ氏は「今回、新しいCEOを任命したのは、パティナックファームが、オーストラリアを代表するコマーシャル・サラ



オーストラリアを代表する調教師のひとり、故ジャック・デナム師



引退を発表したアパッチキャット。(写真は5月に行われたダウンベン10000)

ブレッド・オーガナイゼーションとしての次のステップを踏み出したことを意味する。これまでも高い資質を持つ人材を雇用することに努めてきたが、ピーターの登用はそれを証明するものだ。彼のこれまでの実績と、サラブレッド産業に関与してきた経験が、パティナックファームをオーストラリアでもトップクラスのファームにすることは疑いの余地がない」と発表している。これまで短期間で、次々とマネージメント責任者が辞めており、新任のCEOが今後どれ位長く続くのか、そして、ビジネスマンであった彼がパティナックに何をもたらすのかは、大いに注目される。

新規の生産界参入でまだ色々問題はあるけれど、しかしながらネイサン・ティンクラ氏のサラブレッド産業に対する情熱は大きい。若くして成功しているので、ノッカー(けなし屋)と呼ばれる人からの批判は多い。しかし、先週ティンクラ氏が新聞で発表した次の意見は、その彼の情熱を物語っている。「競馬産業が、単に売り上げだけに頼る時代は過ぎたのかもしれない。したがって売り上げだけでないインカム(収入)源も考えなくてはならない。例えば種牡馬から来る収入の5%を競馬産業に入れる等ということも考えなければならぬであろう」という驚きの発言をした。それは、彼が彼の牧場の種牡馬から得る収入の5%を、競馬界に還元してもいいという意味だ。そこに、彼が単なる「金だけ」の人ではなく、いかにオーストラリアの競馬界・生産界に貢献したいと思っているかを窺い知ることができる。日本にティンクラ氏が来た時に彼とゆっくり話す機会を得たが、その時も「世の中には、自分が儲けることだけ考えて、産業界全部のことを考えない人が多いなあ」と言っていたのだが、今回の発言と一致しているという気がした。

障害競走の廃止問題

メルボルンカップは来年で150年目を迎えるが、ビクトリア州の障害レースも、このメルボルンカップと同じく長い歴史

を誇ってきた。先日本誌の「海外競馬ニュース」でも紹介されていたが、ビクトリア州の障害レースが2010年をもって廃止になることが決まった。今回の決定に関して、日本の中山グランドジャンプをカラジで3年連続優勝させた、エリック・マスグローヴ調教師にインタビューした。「決定のニュースを聞いた時には、本当に驚きました。実際、障害レースの方向に関して調査はされていましたが、決定の発表はかなり突然でした。動物保護団体が、いかにも我々が馬を大切にしないように言っているが、我々は、皆、馬を愛し、できるだけケアをしています。リスクの問題は、実は平地レースとあまり変わらないのです。馬の死亡は、わずか1%のリスクです。しかし、一握りの人たちが牛耳っている過激な動物保護団体は、実際より大きく障害レースの危険性をPRしているように思います。今回の廃止の発表後、関係者が一致して廃止の反対を強く訴えましたから、恐らくビクトリア州の障害レースの廃止決定は破棄されると思いますよ」と明るい見通しを語っていた。さらに、「来年の中山グランドジャンプに出走させる馬はまだありませんが、今トレーニングしているヤングホースたちが出てくれば、近い将来、また優勝できるような馬を連れていく可能性があります。僕の馬ではないけれど、来年オーストラリアから行く馬も、かなり優勝のチャンスがあると思います」と言っている。

今年も、私の「ぼやき」記事にお付き合いしていただきまして感謝感激。新年もまたツウギャザー(一緒に)、HAPPY RACING!
(2009年12月24日)

筆者●プロフィール



Mariko Hyland ■ 団塊の世代。アナウンサー、コピーライターなどを経る。著書に「オーストラリアとニュージーランドの競馬ガイドブック」など。オーストラリア人の夫、2人の娘とシドニー在住。